

東都家奉記

春上

一



天保丁酉新鐫

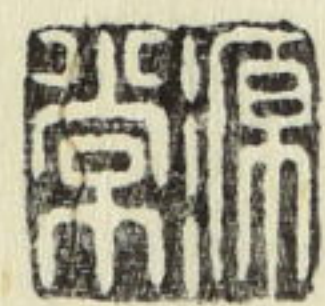
東韻歲更記

全部五卷

齊上膝幸成校家庭遺書
餘更著輯江戶中行事四
卷較法向時坊刻數種詳
細可想已幸成之所為亦洵首
其前人矣。今化國日長。垂髫
戴白。日歡月樂。是在玩花賞

月之地。賽神歎佛之場。雖在
都人士。紛藉繁會。日不暇給。
矧千里蹉跎。逆旅。茹月。以觀
其佳。廣窺_中之廣大者。亦乃
扶是冊。東探西討。窮_中脚力
所至。而無可以恨哉。余嘗撰

三餐一覽。為煙霞作導引。
故於是輯。欣然落筆。不覺
其言之無端也。天保壬辰至
月冠山寺人題



未華三衣書

東都歲時記序



欲窮千里目者。必登高而望。
於是眼界豁然。雲散烟靡。一
淡一濃。如遠如近。有鬱乎者焉。
有真乎者焉。有如練而映者焉。
有如紅而臥者焉。有棊峙者焉。

有蟻散者焉。唯憾依稀茫洋。不可名狀焉。及其進步於絕頂。假遠鏡以望之。鬱乎者。蔚也。真乎者。凶也。如練而映者。川也。如虹而卧者。橋也。綦峙蟻散者。城市也。宮觀也。人馬往來也。嚮依稀也。

茫洋者。今皆昭二。歷二。毫末可辨。錙銖如掇。是河也。假遠鏡之助也。盖並之欲探勝境。縱奇觀者。足未蹈其地。目未觀其事。而徒聞人說話。以爲遣興慰心。出。具。譬猶望千里不假遠鏡。亦安。

得爽茫洋之憾乎。輦街長齋藤
月峯。風源閑雅。好探都下勝境。
神祭佛會。及閭閻出俗。蒼鳥雪
月之候。記出畫之。編成四冊。名
曰東都山事記。嗚乎。此書一出。
使彼徒聞說話。以遣興慰心者。

得昭々塵々。毫末可辨。錙銖如
掇。則亦可以當千里之遠鏡哉。
生者其先人。他冢戶。召所園會
二十冊。如其山川。起落。出沿革。
祠祠佛刹之緣起。竊不畢備。而
至祭會之式。閭閻之俗。等則畧

矣。是月岑氏以著此書之意。而
余斯謂其功殆有倍焉。以何言
之。在於百世出後。慕於百世之
前。欲興廢繼絕者。必取徵於此。
然則非直悅人出耳。固也。其功
之偉。可以知矣。余常以此稱之。

今也。將鐫布。齋而乞序。余更檢
之。圖乙正位。陶陰改容。精確著
明。有加於他日。余撫手歎曰。甚
矣。其所爲肖於其先人。其如此
而後。可無復遺憾矣。卽錄其常
所稱之言。以爲出序。



五

江戸歳事記卷之壹春之部

正月

元日○市一門方御簪代市大名衆御禮 装束より卯半刻迄仕 諸寺及人方湯登城

○諸家年法 南家より二日より 今朝若あて汲む今日より三日迄煮糴煮餅と食一太鼓との屠蘇酒とすむ仕仕棚と儲く今日より六日迄と松の内といふ

○源川洲芝高輪等海濱神田の仕地ふあて日の出と津より紫今曉七時より群集 浦を一日のりといふ江戸の者鳥酔芝浦や車の上より初辰起波江戸向ぬ帆ハありありと風の風参太

毎月 ウツスナ 産云神系 毎月約日十八日廿八日の二日 神田社 芝神明宮 源川八幡又市谷

八幡宮 以藤系八幡宮と餘諸神社系諸寺 元日ハ法社神社あり又当月中

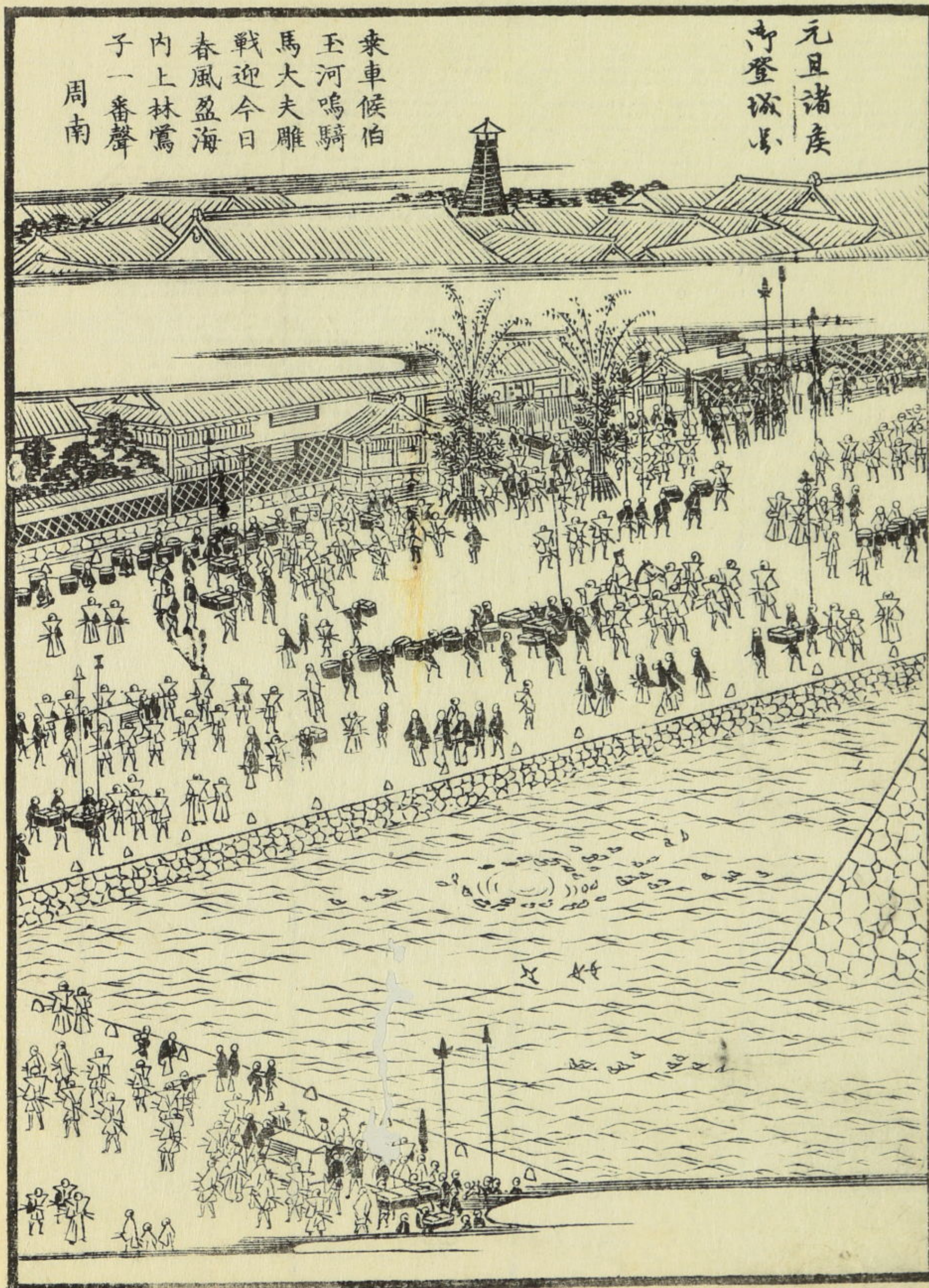
法胞洲福神社 毎月約日十八日 ○恵方系諸社

毎月 妙見系 毎月十八日縁日あり 本下柳橋法性寺 毎月子巻陀羅尼修り正月九月と

降臨日嘉治正月七日二月八日三月三日四月四日五月六日六月七月七日八月十八日九月九月十月

元旦諸侯
市登城

乘車候伯
玉河鳴騎
馬大夫雕
戰迎今日
春風盈海
內上林鶯
子一番聲
周南



源川淨心寺
帳閣

新島越安堂

新在清門所

余法花寺院如見
上安寺之寺

○涉草与

修心會除新

より正月六日あむに
近七日の雪毎夕
降りあり

けりうの鼓
出仕あれと勅

後洞羅太鼓
少子又磨人八日

○ 毎戸天満之
行徳あり

○ 文 ウケ 地 ダ 村 地

每月
本不羅

○本取押

每月	每月
王子權	中迎樓

師用帳(每月谷)

社集編
卷一
廿一月

○三座歌蘇

堺町中村勅之守

香近來より大急
山の手の一帯に

時村の書とあり
ありと馬の馬

初春
路上
圖

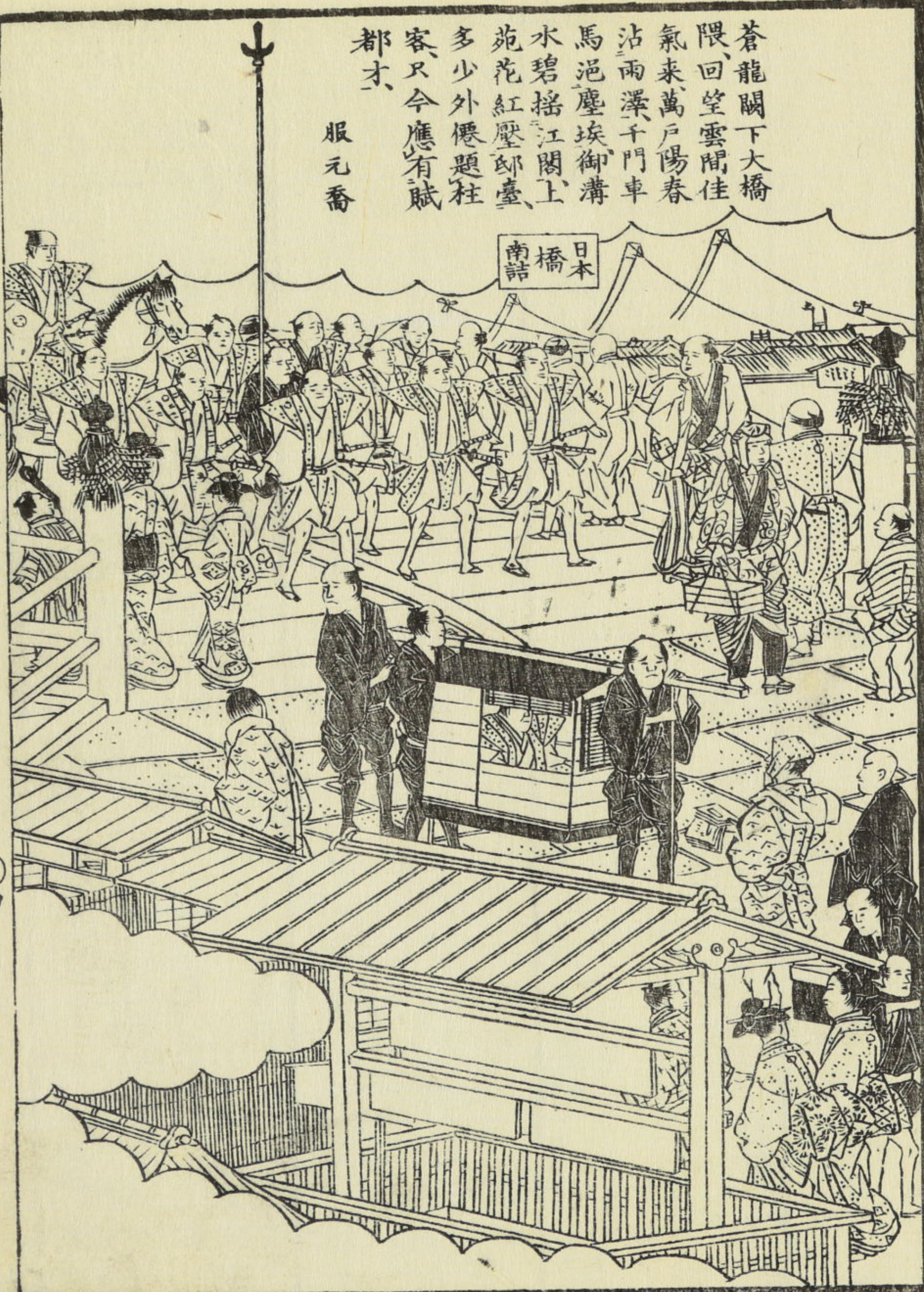
芳主集
去民洗
のろろ
世に
佐民の
ゆふ町
娘ハ
まの
おとろ
美波云
門



蒼龍閣下大橋
隈、回望雲間佳
氣来、萬戸陽春
沾雨澤、千門車
馬泥塵埃、御溝
水碧搖、江閣上
苑花紅、壓郎臺
多少外、僊題柱
客、只今應有賦
都才

服元喬

日本橋
南詰



初卯の日
龜戸妙義
参



南開北開水
方解新莊舊
莊梅已開妙
義祠遠則卯
日遊人翳上
挿符面
柳灣



半
迎
寸
南
藏
院
二
田
寺
所
公
衆
院

午日（毎月） 稻荷系 王子社 高崎社マサキ 津雲吳女ツクモ 三團社ミツダリ 妻戀社 市谷

湯葉及團太杉橋筋 キツ目筋 赤坂大墨炭 キツ目筋 以井川橋筋 キツ目筋 ○毎月月頭の年
 の日溜池上松平大和炭 キツ目筋 や一以川筋のうわー墨弓橋筋 キツ目筋 其外江戸ハ橋筋の社最
 く記さる邊に云

初申日 ○永田馬場山王宮法華三昧^{サミイ} ○沙^サ茅古^キ境内山王宮開戸^{ヒラキト} 刻^{辰上}辰^上刻^{辰上}

散^{サシ}花^ケ三^ミ同^{ドウ}一^{イツ}卷^{マク}院徒^{インドウ}六^{ロク}才^{サイ}子^シ二^ニ人^ニ社^{シャ}政^{セイ}少^{ショウ}事^ジを勤^{シユ}む社^{シャ}壇^{ダン}少^{ショウ}修^{シュ}く急^{キウ}徒^{ドウ}未^ミ凶^{キウ}徒^{ドウ}追^{ツイ}伐^{バツ}乃^ノ弓^{キウ}矢^{バツ}と負^フひ惡^{アク}魔^マ降^{カウ}伏^{フツ}の走^{ソウ}と取^クつ多^タあり

庚申日年中庚申系
高輪光照寺
愛宕ヶ岳禪寺
入谷表宝院

八丁堀松屋橋東詰
今日依郷より書面を別とまくり又庚申年の酒宴を催さ
或ハ妙豆と云一女子鑑計の業と云々ハ誤智とつけそ

同 東葛西染又村帝釈天系法
題經よりあり今日子菴陀羅尼修り板本當院蔵あり至外毎月初申の日百菴陀羅尼修り國難あり

庚申と縁日とすうふ本當出現の日かふふとせり

曆日（毎月） 聖天宮系 卯の日尚一

亥日 毎月 摩利支天系
 上野町徳大寺
 毎月開帳正月秋亥より巻班羅尼の
 外開帳簿あり

源川懷江日克社
亥の多や
同帳あり
雜司々 菅玄 淨院 應利 文天 開帳正
九月 而 子 卷 陀羅尼 修 行

二日 ○國主城主 裝束 諸御役人方御禮登城
の町人沙汰
○船着初

○商賈小今日貨棧と印し紙幣と摩り率札を出る故に市中は賑ひて碎人街小多し

○吉原遊女年譜
今日より幕屋とてへんれふとて仲の町へ出る都て嘉例ふとて
仕若少袖とて個へ悉たふは即ちまた一杯の彩衣とて若て往來は字とて

里邊の道中と云ふ三日より入道と云ふけり。持好の衣裳をてききし。糖蜜紙を
 一々に通月中大黒霧の粧をききし。里の門松ハ各家の方を向けてききし。ききしと
 せり。又正月ハ妓家より庭大と焚き。四倒あり。この里ハ四時繁花あり。といへども。正月もききし。
 縁よりききし。の群集。臺彩文。同形なり。為禱。うかど。お化。ききし。ききし。ききし。の粧。女。古。揚。屋。の。門。飾。

○人形芝居初無以
堺町薩摩座 葦屋町張城座

三月○諸將大石宛の御嫡子方御遷登城
 賢中因長崎辰の刺出仕参り各位要家江
 所人系大坂奈良堀伏見町人沙汰込勤

先例よりて軌と拘あり

○今秋寺謡初（カ） 慶事目表持少て商の割出は寺謡代
寺謡あり諸沙大なる方登城（カ） 江戸の豫小大慶宮の寺謡極々善哉々老松ふふ沙
ふく此例ありと云

○愛宕権現地主神毘沙門天祭事 今年年中割續はたかくてな清々実々
おまゝとて毘沙門の使と稱するものあり

○上野護国院大恩系 大恩天の尊あへ侍る所の様と湯と浸して来結の法人は
りふあけと大く湯又お後の湯といふ事と成る後聲
と得るといへり

毎月 元二大師系 東叡山 毎月といへともふ九月八日にて法人多恩の前の大恩
より南は桂木と陰諸商人市とせり毎月三日、恩恵
大師神彩と掛まゐる民部を法眼の事ありある事と向あひの神彩とて探幽の事あり
則恩恵大師慈眼大師表像向あひある事と云ふ

沙草利利場（カ） 院 白金猿町宝塔寺 維子、文の境内あり東叡山同等の
画彩ありといふ毎月開帳あり

小川為形も元二大師系（カ） 毎月 愛宕下加藤殿不動系（カ） 毎月 下谷茅町宗賢も毘沙門開帳題目係
○江戸名所記（カ） 寛文二 本下川澤光も古くよりある毎月八日あり元二の物あり
あるの四かゝり神彩とある事と成る事と成る事と云ふ

日 毎月 日本橋河原地系 〇新板敷麻子小市市店却とて代物と改め四年の動定と改め多くは日と用とあり
いふ事と成る事と云ふ

人 〇沙草も之社権現法樂 已刻之間一養虎徒人 流編るあり 年刻社人本社
あり三人と成る事と云ふ

〇沙草も之社権現法樂 已刻之間一養虎徒人 流編るあり 年刻社人本社
あり三人と成る事と云ふ

同社半王加持 虎徒已 十一日近半王宝市本寺少て諸人小と人 折の枝へ挿
牛と云ふ

毎月 未羽有言が清も水天文系法 世は厄事と稱する事多し詳ありはる事と云ふ
陸徒一々絶も法人持持と成る事と云ふ

〇江戸英と遠も之社僧徒社人小市市花登城 〇時 先親よりて
執り物あり

谷中天王寺
富の圖

湯治天満宮月
不動なるくび
南ふれ富の昔より
そ夜は今の府に
富真の寺院
敷き所ありとも
も限と屋を沿革
阿ふれこれ人も
き益なるべし
本文亦除き一圖を
加て關する成
補ふ



○良助奉越と云々 六日迄越 今夕門松と云々納む 兼右の以て、十六日コ納む

竹あり、一、小禁あり、今夕

○春去秋来 今秋七種菜と云々 厄拂あり

○毎月 神田三崎町昆沙門末十六日女二日もあり、何事も夕方より始まる

○毎月 四谷新橋後正文院晩夜婆桑百萬遍修り十六日女二日もあり、何事も夕方より始まる

七日 ○若菜 日 街況後諸彦街登城 今夕素練七種菜粥と食を

○毎月 天満宮若菜條の神佐神食と若菜と供入て、十六日女二日もあり、何事も夕方より始まる

○毎月 王子権現牛王加勢牛王宮中より、坊中の以て押入あり、何事も夕方より始まる

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

八日 ○毎月 藥師系 芽場町 八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

○毎月 本町新橋漢より、八種菜粥と食を

正月五日
浅草三社權現
流鏑馬

おくれ
猿
鬼の面
荷兮



○小石川氷川社女入能神乐(毎月)氷田多倫安部天満文京女五日ふも多福とゆらる

○高田砂利坊村氷川系奉射の式あり村中吹奏より人古雅なる神事あり

十一日○新具足の儀新鏡開諸家同

昔ハ廿日と用らるゝかり廿日と刃柄を削
同刃柄と柄入との人信説あり國忌なるに

○新連会
よりて葵安永年改元より改元までは羅文集小見よりきていふ所のふけよこ具足藤道長
新連会も放く古きや式れあるより温知秘鑑

○浅草寺新法
今晩七ツ半時外陣おけり棟梁
修子の法藏人同創の式と云ふ

○下谷稻荷二十八座神乐湯花無形六月九月もあり

○高家貨買帳と綴らひつゝと後人
後帳とつゝと難差
と云へば後人

(毎月)神田錦堀町あんじく系夕方より

十二日○浅草寺温座陀羅尼開白

天下泰平ふ家安全の祈り獲あり今日より十八日
まで七聖教の旨本堂の中札のく不動尊のあに

煙と構へ慢とやうく二百六十八温座の秘法修りあり

(毎月)茶師系八日同(○)新井村梅照院茶師同帳 四月八日又月九月
十二日も同帳也

○上野中堂大般若後彌今日辰の刻一山懸是仕めて修り西僧系より般若のれと云ふ
今日系より八月九月の十三日ハ同帳あり又月
並同帳の棟中より南ハ繫昌のも院ありて
ををの鑑素晴雨と脚より日毎ふ系臨群集して是法幾と儲ふりまた又毎日百卷系

十二日(毎月)祖師系

法苑

堀の内妙法寺

並同帳の棟中より南ハ繫昌のも院ありて

十六日 ○飛戸天満文久^{オホミチ}市食調進

又漢む終りて神樂殿あて神歩何り
郊の目のみ渡あきなる時ハ余目あけ

○淺草報恩寺にて開山の木像へ鯉魚コイと供さ

坊々綴本版派あり一以被比の天満文示現の事ありと例ふとて毎章版派より比の鯉二味
送るに返れとて後派を送るに後派と天満文を辨一廿百初連分の時迄とてとてとて例とて

○湯鳴麟祥院少子從二位春日局

新堂閣廊采藻堂

○小日向殿部坂龍興より法華經の文字を以て画する百羅漢并小釋

迹文殊菩薩觀音等六十餘幅の畫軸と揚子

帳毎二十人陪侍の者ハ親ムヘク氏
重國若輩衆也其多ク歟ハ親マヤ

一句一畫鐵やうな線の如く緻やうな塵の如くうのたうな線とて連うなやうなを圖うな
 とて施すもこれ又經文なり凡妙經一が餘卷とて今書する所ありて府中の小使が義成殿
 伝達といふ人の言なり此が某ハ享保十九寅仲冬に職を脱し長きふ及んで禪刀養法と
 能く一室方お周於てそを技を祇む又丹書と好んく將所玉燕ふ常ひに業世上ふ鳴る
 元より名利誠まはすけりても威權門拒けりといふに難發して自ら極蔭亭と号して
 の以てお自慈まの像と画んくを發起し寛政八年ふむと某經一處より停む又化七
 幸七十七よりて老病小罹り瘡もくを終ふ靜寂を是より先恭南經大典經師高き現
 任天啓和尚より代りてを願ふと記せしる今高寺より傳へて計書して經師の記文を



住持ありて名を
たしむる略也

○圖魔系

世ふあんまの
病日とり

沙弥寺前長延寺
圖魔文六傳生并
脱衣婆立像

同大圓寺十五

沙弥寺奥山

無脱衣婆在坐
畫像者以形也

同寺中正智院

寐釈迦
中内

沙弥寺願寺中内

上野法水親音寺内

下谷廣小路為樂院

下谷坂本若養寺

下谷金松世寺内

湯河圓滿寺

茶脱
衣婆

本郷六町目法光寺内

本根町早目親音内

茶脱
衣婆

茅場町茶師境内

源川

寺法意院

十五傳生并
脱衣婆

同靈巖寺中開長院

茶脱
衣婆

同八幡文境内

報喜寺
の内

本不圓白院

茶脱衣婆在
る以報喜の

多々十五傳地獄
の画幅と掛る

同靈山寺

同法恩寺中大教院

同小割下外花處寺

同合目羅漢寺

三市堂
の内

芝増上寺山内

蓮池の向
俱生并生

同花無院地獄寺内

芝金地院

石像冥途の像あり
茶脱衣婆と抱く

西窪天神寺中隨養院

麻布一本松長傳寺

石六本木紫巖寺

十五傳
脱衣婆

同思不動寺境内

地獄寺内

茶脱衣婆

同思安養院

十五
脱衣婆

渋谷長谷寺

報喜寺
内

三田寺町実相寺境内

同四町目春林寺

報喜
寺

高輪如來寺

本堂
内

南不川長法寺

牛込

通寺町養長院

茶脱
衣婆

同系町松雲寺境内

小日向

榎木
町

還木寺

本像石像
茶脱衣婆

同上ありて目輪寺内

小石川坂若雄寺

市谷柳町光法院

市谷八幡文境内

石坂

同谷町地福院

某王寺 雜司ヶ谷玄淨院

法明寺
中

駒込小南本繩寺正法寺

茶脱
衣婆

同寺町光源寺

大觀寺内

東鴨志性寺

脱衣
婆

王俱生并某木の鬼淨婆利の像の
あや罪人と業のまうり掛る像在

谷中天王寺内瑞雲院

麹町八丁目栖岩院内

同九丁目心法寺

十五
像

平河天満宮社地

日谷内辰形若木寺

文六
像

同不裏通心交院

茶脱
衣婆

同南寺町高成院

法干
報喜寺

中野成願寺

報喜寺
十五傳

脱衣

赤坂一ツ木淨土寺

石像

同威徳寺内

同新町寺修寺内

婆

赤坂一ツ木淨土寺

石像

同威徳寺内

同新町寺修寺内

地獄寺
内

市谷泰平親音境内

同教覺院

茶脱
衣婆

同若光寺境内

地獄寺
内

毎月三十八日
東叡山
西大師詣



ひあ
うや
ふ乃
え師の
月
漢村



○年中妙福寺日親像開帳正九月廿日(毎月)同不安多日親像開帳
十八日○法華三昧法會 ハツチ サニマイ 卯刻本堂より移し修りあり大座敷出仕今日温坐院
羅尼結新あり今秋松明と燈し修りあり要ふも
焚捨るあり

○上座大師末二日同

○大膳粥と号して貴賤小豆粥と食 アヂキ 又十八日ともいふ元二大師ハ
此日慈惠大師の御掛より解脫院文の御筆あり
と冬井町慈惠子お世係十八日ハ慈惠大師二日ハ元二大師
と覺えり人々一慈惠大師ハ寛永二十年十月二日入寂す一法せり元二大師ハ親善の應現
あり元十八日とも法あり云々今日京門前松木を余法商人市より

○鬼子母神末

○田舎南寺町戒仍る鬼子母神開帳正九月十八日廿八日あり
八日ハ 雜司ヶ谷ハ正九月ハ慈惠院羅尼結あり○本不出村
本仏正九月ハ末慈惠寺隨才鬼子母神毎月開帳あり

○親音末

○芝金地院親音藏法 セシボフ 同座あり親音二十箱 二田魚監
の画幅と洋しむ
芝浦清の山下やう内親善系文政五年御佛中出現黄金像あり(毎月)親音の佛社より親善
親音 十七日 上座清水堂 大般若 本六丁目末福寺 本不羅漢も親音修養
十八日

○秋葉権現末

○文地村満願寺 正九月十八日ハ大般若修養毎月十日 駒込河町
正九月大般若修養(毎月)法華新堀端松院別時を依説法
大圓寺 正九月

十九日(毎月)下谷坂本小照燈法事○白金三結坂氷川の佛社末湯花川為報恩寺

○七面系

○本下押上最教寺 正九月ハ最教寺 法華新寺町正覺寺 廿二日
説法正九月十九日末 子巻より修り

○高亮朝院

○高亮朝院 毎月十九日題目満正九月ハ 法華新寺町正覺寺 廿二日
駒込近分光の寺十八日十九日題目満説法 谷中瑞林寺 市谷 修りも開帳
○法華新寺町源空寺御慈悲の目より修り正説法あり廿二日の御あり

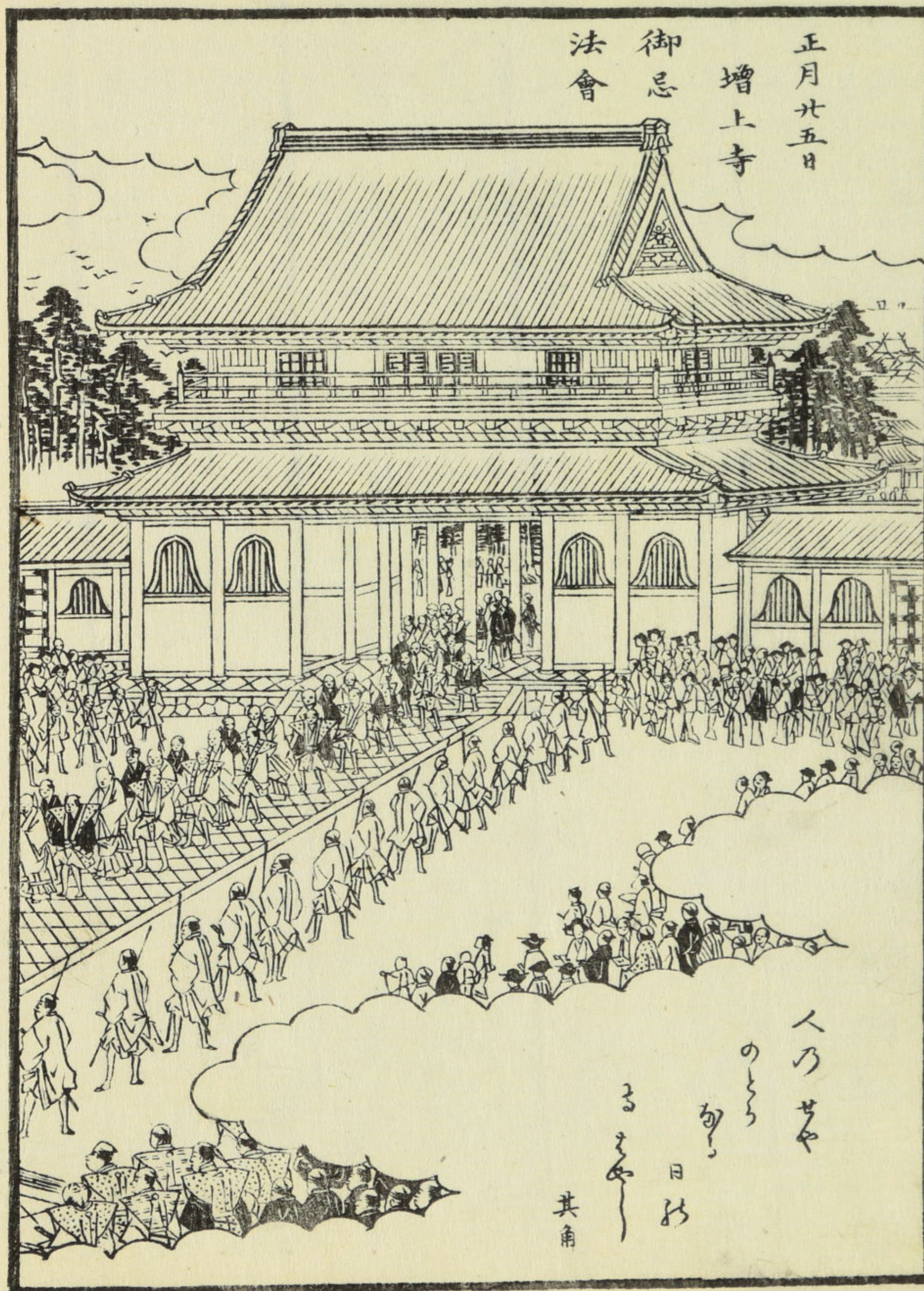
○今秋大佛町

○今秋大佛町町寺丁目二丁目通旅新町の法還又愛比壽様の市立つ
南都愛比壽様の役けり魚類菜蔬愛比壽大恵の像小法法慈持あり
廿日○南都愛比壽様 愛比壽大恵二作と安し鯛魚の群けりと掬けり見をあり万法の
利益貸殖と祈る修報親戚知己をむくく宴飲又怪児の像あり
小於て重懸慈持ありとて價を多取或ハ万取とて定り堂をかく修り高買の像を多り
○今日本村末あり○法華廿二日題目とて難養殿を食し修り高買の像を多り
○法華新寺町源空寺御慈悲の目より修り正説法あり廿二日の御あり

○聖天宮系

○聖天宮系 町内末十月同
谷中吉祥院 同座あり院 小不川養願寺
法乳山ハ正九月の廿日題目あり分て法入あり
二田寺町より聖天文毎月大般若清満あり○麻布慶尾稲荷社樂
○茅場町薬師如来開帳 正九月 飛戸天満宮年穀入穀成乾の修修あり
廿日あり 本村農史寺あり

正月廿五日
增上寺
御忌
法會



人乃
の
日
其角

初地空王閣
諸元梵帝家
經臺翻貝葉
香社結蓮華
癩塔慈雲峻
雞園寶樹斜
遠公寧計飲
月渡馬谿餘
白石



正九月、あゝに嫁し、世に厄除大師と
名して都鄙の男女に多事あるを必

大師自任像每月廿一日寺外一年子開帳日
九月二日阿りまに略見又波卷中開帳あり

富理學侶
派者
白金高野寺
富理學侶
宿寺
二田

開 生外敷とあり三月十日の件とある
 (毎月) 本所回向院放生會十月八十四日あり
 帳

○洛陽門外第六天社祚樂外月九月有廿二○小石門南山社祚樂外月九月有無乃有

毎月 沙弥 山崎町本村 寺 秋山 自雲 具 神 安 性 病 疾 之 憂 言 有 其 落 社 へ 祈 願 せ ば 果 し
唐 詠 あり と 云 云 五 月 の 廿 日 廿 一 日 廿 八 子 卷 陀 羅 尼 修 行 あり

廿二日（毎月） 涉、系、津、藏、前、池、因、取、結、雪、瑜、伽、山、種、現、系、結、今、明、日
（愛宕下池、因、取、結、雪、瑜、伽、山、種、現、系、結、今、明、日）

每月赤坂寺門外大慈度以下廟後寺川稻荷系史九月八日敘若將讀あり

○谷中大因与德寺多开帐子卷陀羅尼说法未几

○河川橋に物賣り稼荷同帳子巻陀羅尼○麻布六本木芋洗坂下船自稼荷利出
 廿二月(毎月)流系随月門勢玉系放生會正九月八親意事流あて旅と授り(毎月)志心奉奉親意事

○赤坂新町雪修寺勢土岡帳 ○今の日澄今森厄津衆海方又在 ○山崎町松崎寺瑜伽撞現大般若月九月
 (毎月) 下総古間木村法坊の作系を率都下より集信多し ○以和親王為光王の忌忌念仏說法

廿四日○今明日飛戸天満宮饗う元の伸車
車をゆつゝ朱の如くの色は形を遠り法入
袖中ふくえりもの祢り多り悪多と轉

譽ウツの圖

○今明日入谷長松と月の丸圓光太師御新岡帳
左右小童子より大師御勢太師と
系縁の時月と糸月文より大師

の心彩あふちれ一時自ら筆をたて海姿と画ぬひととありといふ

每月
 玩花系
 芝愛宸
 撞現社
 群集以
 石像地
 花系
 湯鴻靈雲寺

三國松壽寺
開成寺
深川寺
放生會
日本橋西河原
朱満寺

○満第大川橋多花川戸町角古物六地蔵の石焼簀念仏經行

每月 本所押上春慶寺普賢菩薩宗清
正九月廿四日八十日經轉寺
參礼多て因方々アリ

毎月 白金樹木谷覺林之清心公奉詔正元九月ハ子菴陀羅尼修りあり
 毎月 湯茅ヶ江子菴修り清心公奉○難司ヶ谷宝城子菴陀羅尼修り説法

六月
 毎月 大満宮系法
 湯島
 多満寺・法集人
 出棲木の市河り
 麹町平川社 同
 江戸
 月並連分金
 金を手紙

おー美川師宣うやまと名取給ふつうとある事案小
増上寺山内
茅腔春林
飯倉天汁
小石川

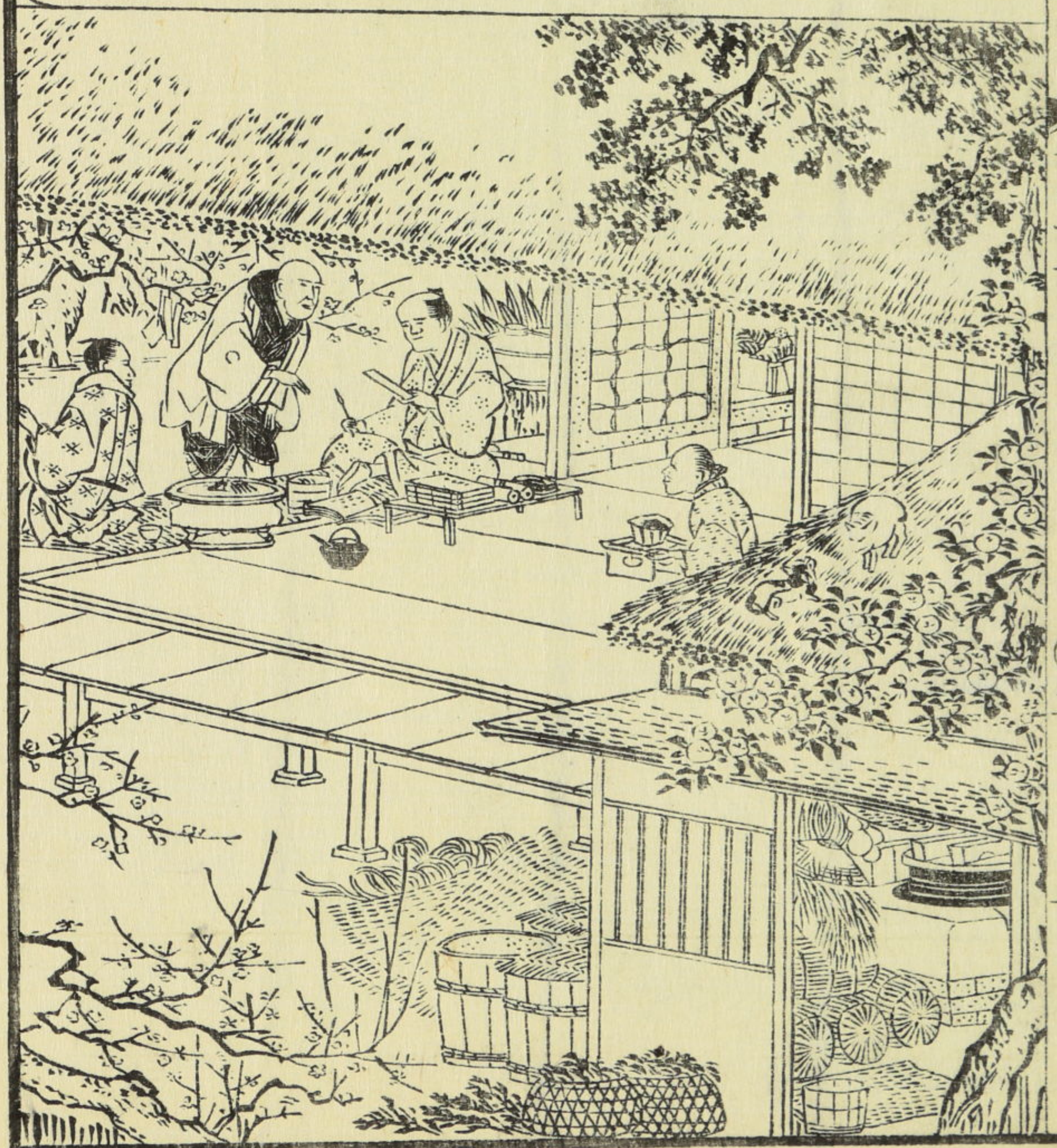
牛天作
正人九月神樂
海國出及云

○白金樹木谷松之^{八十}花城天潢文西九月廿六日大發著○小石川原町天潢文祐東西九月小石川

新都府事

蒲田色
看梅

探春年少拳
鞭来村径一
条将起埃不
解冰姿有清
格香叢々裡
折紅梅
棟巷



海士の
袖より
白く
浦
柳
里乃
蘇麻呂



宝勝院 泉光院 現光院 香昌院

日不定○七福神系 大正神愛比事

神田社或ハ上皇 每天 不忌 毘沙門 天手吉

喜老人 同不裏つる 不安保る

布袋

日暮

福縁事

田畑 西乃店

或ハ喜老人と除くと喜老人の 有吉祥天御入跡あり

又山の子七福神あり○毘沙門二本板 細川侯より取○布袋白令湯堂も天手殿○ 喜老人○福縁事 白令妙田吉妙見事の内○每天日暮縁起と云○愛比事○天手目定 不動も境内

馨○ 五春の十六日同月 神田社地 小石川鶯谷 谷中鶯谷

三勝の大をりより 西村より入る

根岸の里

里候上実家の雪に降りありあり何れもこの辺の雪ハ 系の子孫より一八ありありより由古よりより

梅

立妻より女 六七日め降り

秋田村

江戸より江府十里餘あり在りた程に谷の辺より一里程あり あり民家の園中又ハ畑中より多しこの辺に梅は多しを浦賀

本小牧牧の場房縁の山より一里は看るとされと猪家の地より一里より江府野村乃後江 雪より葉より降りありて東の地より降りありて西の地より降りあり

同二十日同 同二十日同

満田村

満田村

満田村

満田村

満田村

大森の右の方へ入る

又同村満田の山の中 今ハ八幡文后園 増上寺版倉天満文

増上寺版倉天満文

増上寺版倉天満文

増上寺版倉天満文

増上寺版倉天満文

○四谷町 同三十三日

無戸林を数町経梅

無戸林を数町経梅

無戸林を数町経梅

無戸林を数町経梅

大森の右の方へ入る

を餘柿樹多く文人 要密より集る

同聖廟前

少一と云

○六日也

谷中梅園天手目忠石古板

不動も縁○去年ふより雪暖み随ひ遅速あれども大體たうも

○柳東堤の柳もも葉事物の一つなり或は花料と云を昔 谷中よりこの柳の樹を梅と云 ちと馬勒う向ふ柳系七百に本立や春よりむむむありぬと同士の編者山田明阿子 若き以 元年より柳をうへるに終る二百八千甲本ありと云り今ハさういふも減り

江戸歳事記卷之壹春之部上終

